

## 博士學位論文要約

論文題目： 笑いが描く人々—コント番組を事例に—

氏名： 石田 万実

要約：

本研究は、日本のコント番組を研究対象とし、テレビメディアが笑いを通して人々をどのように表象してきたのかを考察したものである。

序論では本論文の目的と研究対象、研究方法を述べた。1953年のテレビ放送開始以来、絶えず笑いの要素を含んだ番組が放送されてきたにもかかわらず、テレビにおける笑いの分析を行った研究は少ない。常識を相対化するはずのお笑いがジェンダーにかんしては常識に従うとの指摘があり（澁谷, 2005）、新たな現実を作り出すバラエティ番組をジェンダーの視点で捉える新たな方法が期待されている（国広, 2012）。このため、本研究はバラエティ番組のなかでも、女装を利用した笑いが多く見られるコント番組を事例に、ジェンダーの視点から笑いを通じた人々の表象とその変遷を検証する。

分析の手順は以下のとおりである。①番組ごとにすべての研究対象とするコントの登場人物を性別、職業、異性装の有無などの項目を作成した表にまとめて、それをもとに番組全体の傾向を把握する。②各コントにおけるジェンダーにかんする台詞や動作、笑いが起こる場面を記録する。③記録をもとに (I) 妻・母と夫・父の表象、(II) 女性労働者の表象、(III) このほかのジェンダーを明らかにするうえで重要な登場人物の表象を分析、考察する。④それぞれの番組の分析結果を比較し、テレビ番組が笑いを通してどのようなジェンダー規範を示してきたのかを、時代による変化とともに検討する。

第1章では先行研究の整理と、どのような番組がバラエティ番組と呼ばれているのかを確認したうえで、テレビにおける笑いの時期区分をした。先行研究については、笑いの効果や社会における役割を中心にまとめた。バラエティ番組の定義はいまだあいまいであるが、新聞記事を確認した結果、「バラエティ番組」が指す番組の内容が変化してきていたことがわかった。テレビ放送開始時は演芸や興業を意味する「variety show」をテレビ番組化したものをバラエティ・ショーなどと呼び、音楽が欠かせない要素であったが、1960年代には音楽以外の要素が強調され、1970年代後半から1980年代にかけて音楽番組と区別されるようになった。そして1980年代後半には多様性のある番組を指すようになり、内容が多岐にわたるなかで、その中心が笑いになった。最後にテレビにおける笑いを、その特徴から第一期（1953-1967年）、第二期（1968-1979年）、第三期（1980-1987年）、第四期（1988-1997年）、第五期（1998-2013年）に区分し、第一期を除く各時期から、週末の午後8時台に放送された番組をひとつずつ選出し、DVDの本編に収録されたコントを分析対象とした。

第2章から第5章では内容分析を行った。第2章は第二期の番組を分析した。その結果、家庭を描いたコントで「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」という役割分業を示していることがわかった。笑いを通して父の子供をうまく教育できない姿や、子供の世話による仕

事への支障を描くことで、子供の世話や教育にふさわしいのは母であることが表現されていた。家族に尽くす妻・母を誇張することで風刺するコントも見られたが、期待された役割を果たさない場合は批判され、笑われることで反面教師となっていた。「女らしくない」職業の女性の一部は、笑いの対象となり、否定的に描かれていた。全体的に女性は従順な人物とされ、男性の期待に応えない場合は、批判の対象となっていた。男性労働者を描くコントでも、指示をする上司と従う部下が登場するが、職場の上司と部下よりも、家庭における夫と妻など、男性と女性間の権力関係を強固なものとして描いていた。番組全体を通して、しばしば性別や年齢、立場に見合った行動をとるべきことを示す表現が見られたが、なかでも女性が「女らしく」あるべきことは強調されていた。

第3章で分析した第三期の番組も、「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」という役割分業を示していた。また、婚姻関係の有無にかかわらず女性は男性の身の回りの世話をし、男性は女性に職に就くことを求められており、登場人物に期待される役割は性別によって決定されていた。妻・母が役割を果たさない場合は、笑いの有無を問わず否定的に描かれていた。女性演者による「女らしい」職業の女性は「自然」な光景として描かれていた一方、女性が「女らしくない」職業に就くことは否定的に表現されていた。また、男性が女性に美しさと若さを求めていることが示され、その期待から外れる女性は笑いの対象となった。したがって、言動だけでなく、外見においても男性の期待に応えない女性を、笑いを通して批判していたといえる。

第4章で論じた第四期の番組は、婚姻関係の有無にかかわらず、家事や男性に尽くすことを女性の役割、女性を守ることを男性の役割としていた。そして妻・母が家事や夫の世話をすること、「家庭をまもる」役割を担うことは、ほとんどのコントで笑いの対象とせず、「当たり前」の光景として描いていた。一方で、夫・父の役割を笑いの題材とするコントが目立ち、家族を守る父や、威厳を見せるために強くあろうとする父を誇張することで風刺する場面もあった。「女らしくない」職業を除き、女性の仕事に対する態度や能力はほぼ否定的に描かれず、特に女性が演じる場合は、働く姿が「自然」な光景とされていた。一方で女性に注意や意見をされることに対して男性が不快感を示す様子や、身体や性にかんする描写を笑いにしており、男性が女性に従順であることや、性の対象として美しくあることを求めていることが表現されていた。男性に対しては、性指向を笑いする場面が見られた。どのような場合でも女性に「女らしく」あることを求めているわけではないが、男女どちらについてもその性別に対する期待を、笑いを交えながら伝える傾向があった。

第5章で分析した第五期の番組は、家族を思って仕事をする父、家族を守る父、「家庭をまもる」母と娘、父に尽くす母を「理想」としていた。妻・母が夫・父に意思を表明したり、役割を果たさなかったりすると、笑いの対象となり、否定的に描かれた。一方、婚姻関係にない場合は、男性が女性に尽くすという期待される役割の逆転を笑いにせず、「自然」な光景としていた。家族を守る父を理想化する一方で、役割を果たしても報われない様子を、笑いを交えて描くことで風刺する場面もあった。架空の世界を舞台とするコントには、理想とされる家族は登場しないが、放送当時の世論調査を参照すると、当時の日本社会を背景としたコントよりも当時の社会を反映した家族が登場していた。「女らしくない」職業に就く女性に限らず、「女らしくない」行動をする女性は、笑いや批判の対象となっていた。

「男らしくない」男性についても、男性同性愛者はその象徴とされ、否定的に描かれていた。第五期の番組は男女それぞれに期待される役割を、笑いとともに「理想」として提示するものの、風刺や疑問視する表現も見られ、特に未婚の若い世代や架空の世界を描くコントにおいては、その役割を絶対的なものとはしていなかった。

第6章では、以上の分析結果を比較した。時期によっては風刺の対象となる役割もあるが、基本的にコント番組は女性に「女らしく」、男性に「男らしく」あることを求め、期待から外れた人物を笑いや批判の対象としていた。つまり、ジェンダー規範を逸脱した人物は笑いの対象となることで反面教師となり、規範を強調する。このとき、森下（2003）による笑いの社会的効用のうち、集団凝集性と排除作用、そして社会化と社会統制が働いているといえる。妻・母に期待される役割は次第に強調されなくなる一方で、夫・父に期待される威厳は、第四期以降で風刺の対象となった。バブル崩壊から「失われた10年」にかけて放送が開始された第四期と第五期の番組は、「外で仕事をする」役割を担う夫・父の威厳を笑いの対象に選ぶようになったと考えられる。さらに第五期の番組は、会社に振り回される男性を誇張して描くなどして、「外で仕事をする」男性の役割について視聴者に問題提起をしているといえよう。このように、時代が進むにつれ、コント番組はジェンダー規範を強調するだけでなく、規範を対象化して笑いにするようになっていた。